

19世紀パロディ・バラッド詩(1) — エイトンとロビンフッド・バラッド —

宮原牧子



チャイルド・バラッド全305編中、40編以上もの数を占める「ロビンフッド・バラッド」は、¹ 中世から18世紀に至るまでの実に長い間、様々な変容を遂げていった。中世バラッドのロビンは礼節深き無法者であり、中世騎士道精神を反映した人物として登場する。しかし、16世紀半ばごろブロードサイド・バラッドが全盛を迎えたころから、ロビンは次第に持ち前の品格を失い、18世紀には勝負に負けるばかりのコミカルなロビン像が確立していった。² 一方、18世紀に伝承バラッドの蒐集が本格的に始まり、詩人たちが伝承バラッドを模倣したバラッド詩を書くよう

になり、以来、バラッド詩もまた様々な発展を遂げていったが、詩人たちの中には伝承バラッドを更にパロディ化するという傾向を見せる者たちもいた。本論では、スコットランド詩人William Edmondstone Aytoun (1813-65)がロビンフッド・バラッドをパロディ化した“Little John and the Red Friar”を取り上げ、この作品をロビンフッド・バラッドの流れの上に読み、パロディとしての意義について考察するものである。

エイトンのパロディ・バラッド詩は、ロビン像が地に落ちた18世紀のブロードサイド・バラッドの流れを受けて書かれたものである。主人公はロビンではなく、彼の第一の手下であり無二の親友であるリトル・ジョンである。設定はロビンがこの世を去り、ジョンと数人の仲間を残して無法者たちが皆、森を去っていった時代である。ジョンは何とかロビンのやり方を引き継ごうと躍起になるが、通行税を払わずに森の中を自由にうろつく「赤い托鉢修道士」なる者とその仲間たちに恐れをなして、彼らの機嫌を取り、命乞いをす

¹ チャイルドが蒐集したバラッドのうち、ロビンを主人公とするものは39編だが、その他“Adam Bell, Clim of the Clough, and William of Cloudesly” (Child 116)や“Willie and Earl Richard’s Daughter” (Child 102、原題は“The Birth of Robin Hood”)や、類似したテーマやモチーフを持つ作品まで数えるならば、その数は50編近くにはのぼる。

² 中島久代他監修 『全訳チャイルド・バラッド』第3巻 (音羽書房鶴見書店、2006年) 「まえがき」参照。

る。作品には隔々にロビンフッド・バラッドのモチーフが配されており、それらは読者にまるでこの詩は伝承バラッドの一つなのではないかという錯覚さえ起こさせる。

作品のストーリーはブロードサイド・バラッド、特に18世紀後半にうたわれた“Robin Hood and the Curtal Friar” (Child 123)に似せて書かれている。このバラッドのストーリーは、短衣の修道士の噂を耳にしたロビンがこれに会いに行き、互いに仲間を呼んで戦いとなるが、勝負に負けそうになったロビンが一転、修道士を仲間に誘うというものである。³ しかし、エイトンのバラッド詩の主人公リトル・ジョンには、負けを認めて相手の強さを称え、更に仲間に誘うという爽快な男らしさは無い。

Now Little John was an outlaw proud,
 A prouder ye never saw;
 Through Nottingham and Leicester shires
 He thought his word was law,
 And he strutted through the greenwood wide,
 Like a pestilent jack-daw. (st. 4)⁴

中世バラッドのロビンは、「男前で礼儀正しく 徳高く／弓を持つては最高の男」であった。⁵ ロビンは無法者であっても礼節を知る男であり、それゆえ仲間からの信頼も民衆からの信奉も厚かったのである。伝承バラッドのロビン像が変化した後もジョンは辛うじて品格を保っていた人物であったが、エイトンはそのジョンの人物像をも地に落とす。森を通る全ての者から通行税を取り立てるジョンからは、品位の欠片も感じられない。

赤い托鉢修道士から通行税を取り立てることを宣言するジョンに、手下のチャーリー・ウッドは次のような苦言を呈する。

“I’ve walked the forest for twenty years,
 In wet weather and dry,
 And never stopp’d a good fellowe,
 Who had no coin to buy.

“What boots it to search a beggarman ’s bags,
 When no silver groat he has?
 So, master mine, I rede you well,
 E’en let the Friar pass!” (sts. 20 & 21)

中世バラッド“A Gest of Robyn Hode” (Child 117)にはロビンの言葉に‘If there be no

³ この修道士こそ、後にロビンの仲間として知られるようになる「タック和尚」の原型である。

⁴ “Little John and the Red Friar”からの引用は全て、William Edmondstone Aytoun and Theodore Martin, *The Book of Ballads* (1845; Edinburgh, 1859)に拠る。

⁵ 「ロビン・フッドと焼物師」2連目。訳は『全訳チャイルド・バラッド』第2巻に拠る。

more but ten shelinges,/ No peny that I se.’ (ll. 163-64)⁶とあり、また“Robin Hood and the Potter” (Child 121)においても‘Yeffe a pore yeman com drywyng on the way,/ To let hem of hes gorney.’ (ll. 87-88)とうたわれているように、中世バラッドのロビンたちの掟は、金持ちからは厳しく税を取り立てる一方で、貧しい者は無条件で道を通し、時に金品を恵んでやるというものであった。チャーリー・ウッズの言葉はこの掟を踏まえている。しかしジョンは次のように答える。

“Now cease thy prate,” quoth Little John,
 “Thou japest but in vain;
 An he have not a groat within his pouch,
 We may find a silver chain. (st. 22)

更にジョンは、無一文の者はシャーウッドの森を通さないと言い張る。中世バラッドのロビン一味の精神は崇高なものであった。しかしこの台詞に象徴的に見られるように、エイトンは無法者たちの精神を地に落とす。ジョンは弓と矢と剣と楯と六尺棒という、伝承バラッドには決して見られない重装備で、赤い托鉢修道士を探しに行く。



目指す相手を探し出したジョンは、‘Now may our Lady be my help,/ Else beaten I well may be!’ (ll. 159-60)と祈る。「ロビン・フッドの武勲」にも‘Robin loued Oure darë Lady; / For dout of dydly dynne’ (ll. 37-38)とうたわれているように、聖母マリアはロビンたちの崇拝の対象であり、このためロビンは女性全般を敬愛している。このことは、ロビンが中世騎士道

精神を反映した人物であると考えられてきた理由の一つであり、それゆえロビンは自分を死に追いやった女修道院長にできえ復讐しようとはせず、‘If I shold doe any widow hurt, at my latter end,/ God . . . wold blame me.’ (“Robin Hood’s Death”, ll. 98-99)と云うのである。伝承バラッドのロビンが聖母マリアに祈る時、その祈りは彼の純粋な信仰心によるものであり、上に引用したエイトンの描くジョンの「さもなくばわしは打ちのめされる」という言葉に見られるような駆け引きめいた卑屈な心情とは無縁のものであった。

ジョンと修道士の戦いは、次のようにうたわれる。

⁶ 伝承バラッドからの引用は全て、Francis James Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols (1965; New York: Dover, 2003)に拠る。

Little John he raised his quarter-staff,
 And so did the burly priest,
 And they fought beneath the greenwood tree,
 A stricken hour at least. (st. 45)

戦いの描写の変化は、中世バラッドからブロードサイド・バラッドへと時代を経る中で起きたロビンフッド・バラッドの変容の中でも大きな特徴の一つである。中世バラッドにおいては、うたの大部分を戦いの描写が占めていたのに対し、ブロードサイド・バラッドが盛んに書かれるようになった16世紀半ば以降、そのような描写は極端に減る傾向にあった。⁷ 上に引用した45連目は、ブロードサイド・バラッドにおけるあっさりとした戦いの描写を更に振ったものである。4行目の‘stricken’という単語が面白みを増している。

劣勢に立たされたジョンは、休戦を申し出る。勝負に負けそうになったロビンが角笛を吹いて仲間を呼ぶというのは、ブロードサイド・バラッドに多く見られる展開である。ジョンが仲間を呼び寄せると、修道士も仲間を呼ぶ。

Little John he wist not what to do,
 When he saw the others come;
 So, he twisted his quarter-staff between
 His fingers and his thumb. (st. 51)

ロビンフッド・バラッド中、ロビン像の失墜を考察する上で最も重要な作品の一つである“Robin Hood and the Beggar II” (Child 134)において、屈強の乞食に恐れをなしたロビンの様子は、“He could not fight, he could not flee,/ He wist not what to do” (ll. 97-98)とうたわれる。これほどまで無様に狼狽するロビンは他のバラッドには見られない



が、エイトンの描くジョンの狼狽ぶりは、このロビンと同様に惨めなものである。しかし、六尺棒を回すジョンの軽々しい仕草は、勝負に負けることを恥とする伝承バラッドの無法者たちには見られない描写である。

勝ち目が無いと悟ったジョンは、修道士の機嫌を取って更なる戦いを避ける。ジョンが修道士に名前を変えるよう要求するのは、18世紀にうたわれた“Robin Hood and Little John” (Child 125)において、ジョンがロビンの仲間を迎えられた際に、その名前を‘John Little’から‘Little John’に変えられたというエピソードが基になっているのであろう。また、ジョンが修道士に法王への伝言を頼む57連目の言葉の

⁷ 『全訳チャイルド・バラッド』第3巻「まえがき」参照。

中で、自分の「義理の父」であると述べる‘Mat-o’-the-Mint’とは、John Gay (1685-1732)のバラッド・オペラ*The Beggar’s Opera* (1728年初演)の主人公、追剥Macheathの手下の一人の名前である。⁸ エイトンが、ジョンの苦し紛れの言葉の中にゲイの作品が生み出す痛快な笑いの要素を加えることによって、作品を重層的なものにすると同時に、決して絶えることのない爽快な無法者の世界を読者に予感させていることは、注目に値する。

おもしろおかしく描かれたジョンの奮闘は、時代錯誤の行動以外の何ものでもない。しかしエイトンは最終連に次のような言葉を加えている。

So ends this geste of Little John —
 God save our noble Queen!
 But, Lordlings, say — Is Sherwood now
 What Sherwood once hath been? (st. 58)

エイトンのパロディ・バラッド詩は、ロビンやジョンの伝説を徹底的に貶めるために書かれたものではない。エイトンがこの作品の主人公をロビンではなくジョンとしたのは、ロビンの時代は過去のものであるという意識からであろう。しかしこの最終連の言葉から感じ取られるのは、そのような古き良き時代に対する哀惜の念である。そしてその時代を忘れてはならないという切なる願いである。

ロビンフッド・バラッドは様々な変容を遂げたが、一つだけ変わらないものがある。それはロビンの人間臭さとそこから生まれる笑いの要素である。ロビンは完全無欠なヒーローではない。勝負によく負ける。負けたにも拘わらず、掛け金を踏み倒す。弱気になって愚痴をこぼす。女装する。そんなヒーローらしからぬ欠点も意外性も漏らさず伝えてきたロビンフッド・バラッドは、民衆の心を捉えて離さぬ魅力に溢れている。なぜなら、ロビンは民衆の夢であると同時に、現実であったからである。現実離れしたヒーローでは、現実を生きる民衆が母体となるバラッド風土の中では、これほどの長い間存続に耐えることはできない。ロビン・フッドというヒーローは、後世に残すべき作品の取捨選択に最も厳しい民衆の目というフィルターを幾重にも通過して、時代時代を生き抜いてきたのである。変容するもの、しないもの、この対極にある二つの要素をロビンフッド・バラッドは持ち合わせている。

エイトンのパロディ・バラッド詩もまた、二つの要素を持ち合わせている。ストーリー

⁸ 作中Mat-o’-the-Mintは、‘a promising, sturdy fellow, and diligent in his way; somewhat too bold and hasty, and may raise good contributions on the public, if he does not cut himself short by murder.’ [John Hampden, ed., *Eighteenth-Century Plays* (1928; London, 1954) 114]と紹介される、マックヒースの信頼も厚い追剥である。因みに、マックヒースの追剥仲間の中には、数々の異名を持つ‘Robin of Bagshot’なる人物も登場する。また、エイトンの作品中のジョンの小姓‘Ben Hawes’の名はロビンフッド・バラッドの中には見られないが、これはゲイの作品中に登場する追剥‘Ben Budge’から採ったものかもしれない。

はブロードサイド・バラッドを準えたものだが、その構成は中世バラッドを模倣しているのである。2部構成となっていることや、⁹ 26連目と58連目に‘geste of Little John’という言葉が登場することから、エイトンが壮大な構造と気高いストーリーをもつ中世バラッド「ロビン・フッドの武勲」（1400年ごろ成立）を意識して、自らの作品を書いたことは明らかである。更に会話の量にも注目したい。エイトンのバラッド詩は、全243行中143行、つまり約59%が会話で成り立っている。中世のロビンフッド・バラッドとブロードサイド・バラッドのそれとの会話の量を比較すると、もちろん例外はあるが、大きな差があることが分かる。例えば「ロビン・フッドの武勲」では全体の約65%、また15世紀半ばごろにうたわれた“Robin Hood and the Monk” (Child 119)では全体の約50%が会話であるのに対し、17世紀のブロードサイド・バラッド“Robin Hood and the Pedlars” (Child 137)では全体の約27%、“A True Tale of Robin Hood” (Child 154)では480行中17行、つまり会話が占める割合は、全体の約3.5%に過ぎない。エイトンのパロディ・バラッド詩は、会話が多くの割合を占める中世バラッドの構成に近いことが分かる。

作品の出だしも特徴的である。

The deer may leap within the glade;
The fawns may follow free —
For Robin is dead, and his bones are laid
Beneath the greenwood tree. (st. 1)

これは、「ロビン・フッドと修道士」のような中世のロビンフッド・バラッド特有のうたい出しである。¹⁰ ブロードサイド・バラッドは、「さあお聞き下さい」という呼びかけから始まるのが常である。エイトンは、ロビンが品格を失ったブロードサイド・バラッドに似せたストーリーを書きながら、その構成はロビンが礼節深き無法者であった中世バラッドを模倣していたのである。

ここでエイトンとロビンフッド・バラッドとの関わりについて考えたい。エイトンはスコットランドに伝わる伝承バラッドを蒐集し、1853年に*Ballads of Scotland*として出版しているが、その中には“The Birth of Robin Hood”という16世紀にうたわれたバラッドが収録されている。¹¹ 作品の注でエイトンは、イングランドの読者にとってはスコットランドでロビンのバラッドがうたわれていたということは驚くべき事実であろうが、ロビンの

⁹ ロビン・フッド伝説の骨格を成すと考えられている「ロビン・フッドの武勲」は、全456連が8部分に分かれて構成されている。

¹⁰ 例えば、“Robin Hood and Guy of Gisborne”の1連目は、‘When shawes beene sheene, and shradds full fayre,/ And leeues both large and longe,/ Itt is merry, walking in the fayre fforrest,/ To heare the small birds songe.’とうたわれる。

¹¹ チャイルドはこの作品をロビンフッド・バラッドには数えていない。

名声はボーダーを越えて轟いているのだと述べている。¹² 特にリトル・ジョンについては、スコットランドの歴史家Hector Boeceの‘In Murray land is the kirk of Pette, quhare the bonis of Lytill Johne remanis in gret admiration of pepill.’¹³ という言葉を引用し、その人気ぶりを強調している。ロビンは決してスコットランドと無縁のヒーローではない。ロビンは複数の古い歴史書において実在の人物として記録されているが、その最古の例はスコットランドの歴史家Andrew de Wyntounによる*The Orygynale Cronykil of Scotland* (1420年成立)である。¹⁴

そして何よりもエイトンは、ロビンフッド・バラッドをよく知っていた。彼のパロディ・バラッド詩には、中世バラッドとブロードサイド・バラッドの両方のモチーフがふんだんに用いられており、見事に伝承バラッドの雰囲気醸し出している。また、中世バラッドの構成とブロードサイド・バラッドのストーリーを交錯させるという複雑なパロディは、ロビンフッド・バラッドに対する深い知識無くしては、到底書けるものではない。エイトンと共にパロディ詩集を出版したTheodore Martinは、エイトンのパロディ制作における詩人の姿勢について、‘Let no one parody a poet unless he loves him’¹⁵と記している。エイトンはロビンフッド・バラッドを好んでいたからこそパロディを書き、そしてその際、よりスコットランドに馴染みの深いリトル・ジョンを主人公としたのだと推測できよう。

ロマン派の詩人John Keats (1795-1821)は、1818年に“Robin Hood”という作品を書き、エイトンと同じく過ぎ去った時代への哀惜の念を表している。

... let us sing,
 Honour to the old bow-string!
 Honour to the bugle-horn!
 Honour to the woods unshorn!
 Honour to the Lincoln green!
 Honour to the archer keen!
 Honour to tight little John,
 And the horse he rode upon!
 Honour to bold Robin Hood,
 Sleeping in the underwood!
 Honour to maid Marian,

¹² Cf. *The Book of Ballads* 143.

¹³ *The Book of Ballads* 144.

¹⁴ Cf. ‘Than litill Iohne and Robyne Hode/ Waichmen were commendit gud, In Yugilwode and Bernysdale / And usit this tyme thar travale.’ [qtd. from J. C. Holt, *Robin Hood* (London: Thames and Hudson, 1982) 40]

¹⁵ Theodore Martin, *Memoir of William Edmondstoune Aytoun* (Edinburgh, 1867) 63.

And to all the Sherwood-clan!
Though their days have hurried by
Let us two a burden try. (ll. 49-62)¹⁶

このようにキーツはロビン・フッドの時代を、過去のものとして振り返り、その栄光を称え、そし友人に「せめて歌をうたおう」と呼びかける。エイトンの意識とキーツの意識との根本的な違いは、エイトンがロビンの時代を過去のものとして偲ぶのではなく、生き活きとロビンの仲間たちを蘇らせた点にある。過去に栄光を与えるのではなく、バラッドの歴史の上に更なるロビン・フッド伝説を作り上げたのである。

そしてこのことは、この作品がパロディであるということによって可能になったと言っても過言ではない。優れたパロディは、優れた文学批評足りうる」と述べるGraeme Stoneは、パロディの本質について次のように記している。

[Parody] may query overstatement, dispose of sentimentality, remote historical process, re-introduce social influence, banish outworn forms, revive discarded forms thought to have long been exhausted, and rescue art from narcissism.¹⁷

アーサー王伝説のパロディとしての側面を持っていると言われる中世のロビンフッド・バラッド。¹⁸ この中世のロビンフッド・バラッドのパロディとしての側面を持つブロードサイドのロビンフッド・バラッド。つまり、ブロードサイド・バラッドのストーリーをパロディ化したエイトンのバラッド詩は、過去のものとして絶えかかっていたロビンフッド・バラッドの生命を蘇らせたと言えるのである。

近世以降のバラッドに度々見られるロビンやその仲間たちの多少の卑屈さやだらしなさは、彼らの伝説の長いスパンの中で見れば単なるご愛敬であり、何ら彼らの魅力を損なうものではない。むしろ人々はそんなロビン・フッド伝説に愛着の情を持っていったのではないだろうか。エイトンの詩作の意義とは、自らのバラッド詩をこの壮大なロビンフッド・バラッドの歴史の上に置き、ロビン・フッド伝説を継承するというものではなかったろうか。

(本論は、『全訳チャイルド・バラッド』第三巻に「まえがき」として記した「ロビンフッド・バラッドの変容」への追記であり、また日本カレドニア学会2006年度全国大会における発表原稿に加筆・修正したものである。)

¹⁶ 作品の引用は、John Keats, *The Complete Poems*, ed., Miriam Allot (London: Longman, 1970)に拠る。

¹⁷ Graeme Stone, ed., *Parodies of the Romantic Age* (London, 1999) xxvi.

¹⁸ 上野美子 『ロビン・フッド物語』 (岩波書店、1998) 参照。